

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

探索と推論の限界心理学：
アフォーダンス理論と関連性理論の架橋＜特集「文化人類学を自然化する」＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2024-12-13 キーワード: 実践 コミュニケーション 環境 記号 情報, practice communication environment signs information 作成者: 飯田, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/0002000232

探索と推論の限界心理学

—アフォーダンス理論と関連性理論の架橋—

飯田 卓*

Marginal Psychology of Search and Reasoning:
Bridging Affordance and Relevance Theories

Taku Iida

本稿では、人類学の分野で別個に扱われることの多かったアフォーダンス理論（生態心理学、道具技法論）と関連性理論（記号論、コミュニケーション理論）を統合するための基礎的作業として、ふたつの理論の共通性を考察する。まず、両理論は互いに排除しあうものではない。アフォーダンス理論は記号現象を対象としにくいという制約があるが、関連性理論をはじめとするコミュニケーション理論は物理的環境のなかでの行為も記号現象も等しく対象としうる。そのいっぽう、いずれの理論も、主体をとりまく環境に散在するさまざまな情報を探索しながら選びだし、それをもとにして状況を認知する点で共通する。これは、脳内に精密な表象を構成することで状況を認知するという考えかたとは大きく隔たる。ふたつの理論は、その適用対象を違えながらも同じ立場に立っており、統合することも不可能ではないのである。このことを意識していれば、心理学者ならぬ門外漢の民族誌家でも、他者の「心理」にもとづきつつ、フィールドで直面することがらを記述できる可能性がある。本稿は、そうした「限界心理学」を始めるための準備作業である。

This article analyses the common bases of affordance theory (and relating ecological psychology as well as Mauss's *techniques mécaniques*) and relevance theory (and related communication theories as well as semiotics or semiology), which have been separately discussed in anthropology, as an initial preparation for the unity of both theories. First, these two theories are not mutually exclusive. While affordance theory has difficulty in coping with

*国立民族学博物館

Key Words : practice, communication, environment, signs, information

キーワード : 実践, コミュニケーション, 環境, 記号, 情報

signs and semiosis, relevance theory, as well as other communication theories can equally analyse actions in the physical environment as well as semiosis. On the other hand, both theories are the same in that the subject searches for various information scattered in the environment and selects useful information that can serve the cognition of their own condition to act. This idea is very different from the fact that the subject reconstructs detailed representations in their brain for their cognition and action. Therefore, both theories have commonalities and can be integrated. Taking it into account, ethnographers or non-professional psychologists have the possibility to succeed in describing what they face in the field in consideration of others' "mind." This article is a trial to start such "marginal psychology."

1 はじめに	4 関連性理論
2 アフォーダンス理論	5 エコロジカル情報と記号の併用
3 コミュニケーション理論との隔たり	6 不完全な時空間情報とおした認識

1 はじめに

学術の専門化が進んだ現代において、ある分野の知見を別の分野に活かすうえでは、もとの分野において学術情報がどのような特性を有するかにとくに留意しておくべきだろう。文化人類学の場合、一般的な条件においてひとつの事象がどのように生ずるかを説明することよりも、特定のコンテキストがその事象の展開とどのように関わるかを明らかにしようとする傾向がある。言いかえれば、法則定立以上に、コンテキストと事象との関わりを明らかにすることがめざされているというのが特徴だ。このため、専門化が進んだ現代日本の文化人類学においては、地域ごとに異なるコンテキストをふまえてヒトの行動・社会・規範を理解しようとする専門家がいるのに加えて、各地の先住民や性的マイノリティ、移動生活者など、いっそう複雑なコンテキストのもとでそれらを理解しようとする専門家がいます。多くの自然科学において、理論の拡張性を高めることが専門化とみなされていることをふまえれば（チン 2019: 64–65）、これはちょっとした驚きかもしれない。

とはいえ自然科学においても、たとえば生態学のように、コンテキストを重視

する分野は例外的でない。また、それ以外の分野でも、理論の拡張性を高める過程で特定の事象に関わる因子を細かく解きほぐし、あたかもコンテキスト分析をおこなうかのような手続きをとることもある。この意味において、人類学も、自然科学など他の分野と本質的な差があるとはいえず、現に知見の流用は相互におこなわれている (Bloch 1990; 2005)。しかし、相互の交流をより活発にするためには、共通の概念を用いて、共通の問題設定にもとづきつつ、それぞれの分野での研究を進めていく必要がある。本特集の主張する「自然化」プロジェクトとは、人類学において自然科学の方法や概念を選択的にとり入れ、両者のあいだに横たわる深い溝を埋めて交通を活発化させることにほかならない。とくに、コンテキストに左右されやすい人間行動という現象を究めるうえで、人類学の役割は小さくないと筆者は考えている。

しかし共同研究会で議論をおこなううち、ことは人類学と他の分野とのあいだの問題だけではなく、場合によっては人類学内部でもそうした「共約 (commensuration)」が必要なことに気づかされた。本稿は、人類学において注目されてきた心理学のアフォーダンス理論と、人類学や言語学、社会学によって洗練されてきたコミュニケーション理論とが相補的な関係にあることを指摘し、両者の対話を促すことを目的とする。コミュニケーション理論のなかでも、とくにアフォーダンス理論と相性がよいものとして本稿が着目するのは、関連性理論である。本稿でおこなう交通整理は、人類学内部をひとまずの対象に据えているが、傾向の大きく異なる両理論の架橋をおこなうことは、理論の拡張性を高めつつ他分野との対話の地ならしをおこなう意義をもつはずである。

標題に掲げた「限界心理学」という語について説明しておこう。これは筆者による造語で、本稿のもとになった研究会での発表題目に用いたものである。心理学者ならぬ門外漢の民族誌家が、フィールドで見聞きするさまざまなことがらを、他者の「心理」にもとづきつつ、しかし体系だって説明することをそのように表現した。マージナルな心理学だから限界心理学である (鶴見 1999)。この方法論を採用することで達成しようとした目標は、①外的刺激があってもなくてもヒトは行動を起こすこと、②ひとつの刺激に対し一貫して同じ反応をする人も反応を変える人もいること、③ある集団がひとつの刺激に対して一定の傾向を示すこともそうでないこともあること、といった相互に矛盾することがらを同時に説明す

ることだった。

上記の目的をはたすため、以下に続く第2章から第5章では、フィールドで見聞きすることがらを念頭に置いて主観に陥ることのないよう、相補的な関係にあるふたつの理論を紹介しながらその接合を試み、筆者なりの限界心理学を提示する。その行論では主として、個体とそれをとりまく環境との相互作用を参照する。というのも、人類学者がフィールドのできごとを記述するうえでは、個体と環境との相互作用（もしくは個体どうしの相互作用）にまず着目するからである。このことはまた、心理学を主知主義に陥らせず、本特集の序論で中川が述べる「自然化された人類学」（自然科学となめらかに連なる人類学）を実現するための重要な手続きと考えられる。

上記の作業で明らかになるのは、個体と環境との相互作用においてすら、直接的経験についての記憶や他者の経験を介して得られた知識（「百科事典的記載事項」）が重要な役割をはたすことである。こうした環境からきり離されたことについて、現在の認知科学が解明すべきことはまだ多い。そこで最終章となる第6章では、アフォーダンス理論や関連性理論と比較的相性のよいダニエル・デネットの所説を手がかりに、時系列からみても空間配置からみても曖昧で断片的な情報がなぜ首尾一貫した行為に結びつくのかを概観する。このことをつうじて本稿では、限界心理学がたんなる行動主義心理学から離床し、さらなる自然化に向けて歩むための道筋をつける。

2 アフォーダンス理論

アクターネットワーク理論やマテリアリティの理論が脚光を浴びるのにもなつて、人類学では制度や規範よりもモノが論じられることが多くなっており（春日2011; 床呂・河合2011; 古谷・関・佐々木2017）、ヒトによるモノの知覚とそれへの働きかけを扱うアフォーダンス理論は、その重要性を増しているように思われる。アフォーダンス理論とは、実験場面における刺激と反応の連鎖のみを重視しがちな心理学的理論から距離をとり、環境内を探索してその後の行動に資する情報を選びだすという、主体的な人間行動を重視した理論である（佐々木1994; リード2000a）。アフォーダンスとは、環境内に散在するさまざまなモノに備わる、知

覚主体にとっての有用性を指す。アフォーダンス理論によれば、環境は主体に対して視覚刺激や聴覚刺激などの感覚刺激だけでなく、知覚主体の身体と環境との関係をも同時に提供（アフォード）しているのであり、主体がその環境のなかで行為するにあたってはアフォーダンスの探索が重要だとされる。こうした考えかたは、厳密に統制された実験条件のもとで動物の反応を測定しようとする旧来の実験心理学を疑問視し、動物がたえず運動しながら知覚している事実を重視するなかで生まれたものである。このように、条件統制が比較的ゆるやかな実験環境（場合によっては野外環境）での実験・観察を重視するのが生態心理学である。このため、アフォーダンス理論や生態心理学は、人類学者がフィールドで観察したことがらをも考察対象にすることができ、人類学理論との親和性は高い（飯田 2019; Iida 2019）。

しかし、人類学者がアフォーダンス理論に直接言及した例はまだそれほど多くない。その理由としては、アフォーダンス理論の創始者ジェイムズ・ギブソンが実証性に厳密なあまり、他分野への拡張性をそれほど意識しなかったということがあげられる（ギブソン 1985）。とはいえ、たとえば心理学史の立場からエドワード・リードがおこなった同理論の紹介などは、他分野への応用という観点からみておおいに示唆に富む（リード 2000a）。人類学者ティム・インゴルドも、リードを参照しながらその意義を論じている（Ingold 2000: 157–171）。まずはそのようすを一瞥しよう。

個人の認知や行為は一般法則に従うものの、それを規定する従属変数のなかには、集団特性に関わる変数が含まれている。このため、自然科学としての心理学の後に形成された社会学や民族学は、心理学が扱えない集団固有の現象を説明する役割を負うことになった。この考えかたは、エミール・デュルケームにまで遡るもので、その後はイギリス社会人類学やアメリカ文化人類学にも継承された。その後、心理学は行動主義によって自然科学的な傾向を強めるいっぽう、人類学は解釈学への転身を図り、両者の乖離はますます明らかとなった（スペルベル 1984）。このことはまた、17世紀前半のデカルト以来西欧哲学を支配する、心と身体二元論を強化することにもなった（デネット 1998: 92; リード 2000b）。

ピエール・ブルデューの実践理論は、この分業体制に一石を投じたものである（ブルデュ 1988）。周知のとおりブルデューは、ハビトゥスが成りたち更新される

契機が実践の場にこそあり、イメージ空間や表象空間といった主観（間－主観）の場のみにかぎられないことを指摘した。その理論的影響は、心理学と人類学の双方においてあらわれているとインゴルドはいう。

心理学において、実践理論の受容はアフォーダンス理論を介しておこなわれた。リードによれば、ヒトにかぎらず動物一般が世界ときり結ぶさいの行為と意識は、すべてサイコロジカルなものである（リード 2000a: 38）。したがってそれを明らかにするためには、その個体に行為を促す周囲のエイジェンシー、つまり、近未来においてその個体に資する環境のアフォーダンスにも目を向けなければならないという。興味深いことに、リードによれば、ある動物の知覚システムが精緻化すると、その動物がまさしくきり結びつつある環境のなかにはないアフォーダンス群も意識できるという（リード 2000a: 203）。このことは、言語的コミュニケーションにおいてとくに重要なので、後段で詳述しよう。

いずれにせよアフォーダンス理論は、サイコロジカルな過程が身体の外でも展開していることに着目することで、心身二元論の誤謬をのり越えようとした。このことは同時に、サイコロジカルな過程が個体に閉じられたものでなく、あるていどまでは第三者にも経験でき説明可能なものとする点で、ブルデューの考えかたにも通底している。アフォーダンス理論は、ブルデューによるラディカルな見なおしを心理学の側で継承したものだが、人類学においても、フィールドで集めた資料を心理学的に分析するための枠組みとしてふさわしいといえよう（Ingold 2000: 166–168）。

いっぽう人類学の側に目を向ければ、ブルデューの実践理論の影響が大きかったことは論を俟たない。実践理論だけでなく、それを発展させたジーン・レイヴらの正統的周辺参加論も日本で広く受けいれられている（田辺 2002）。しかし、アフォーダンス理論をとおして実践にアプローチする試みは、まだ少数にとどまっている。たとえば湖中真哉は、ケニアの人びとが中古タイヤを素材としてサンダルを作りだすプリコラージュを記述するさい、廃物のアフォーダンスをみいだすハビトゥスこそが人びとの共同性を示していると指摘した（湖中 2007）。湖中は、たんにアフォーダンス理論をとおして実践理論の正当性を示したのみならず、インゴルドが整理したように、人類学における因習的枠組み（ここでは、工業製品や近代的素材の軽視）の再考をも進めたといえる。また飯田卓は、湖中と同じく

廃物利用の例をマダガスカルで観察し（飯田 2010）、アフォーダンス理論をふまえながら学習場面を民族誌的に記述することの可能性を指摘するとともに、情報や知識、身体知といった概念の整理をおこなった。そして、マルセル・モースが展開した身体技法論や道具技法論（Mauss 1967）をこうした概念セットのもとで発展させられるとした（飯田 2019; Iida 2019）。

しかしこれらの研究では、物質文化（インゴルドは、この用語そのものにも見なおしを迫っている）の記述が前景にせり出すあまり、実践そのものの記述は十分とはいえない。心理学がブルデューの影響によって環境の見なおしに成功したことに倣って、人類学の側でも、アフォーダンス理論の考察によって人類学の因習的枠組みの見なおしをいっそう進めることが期待される。

3 コミュニケーション理論との隔たり

人類学の分野でアフォーダンス理論の受容が本格化していないこと、また、それによって人類学と心理学との協業が進んでいない理由のひとつは、前述したギブソン自身の方法的禁欲に関わっている。そのほかにもうひとつ、知識や言語など、文化的差異に関わりの深いテーマをアフォーダンス理論がどう扱うのか見とおせないことも大きな理由である。これは人類学側で解決すべき問題である。物理世界と記号世界を統合することのむずかしさは、知覚をとおして経験されるものと経験されざるもの、技術的行為と表現的行為といった対比のもとに成立した、心理学と人類学の分業にも関わっているからである。

しかし、その分水嶺をのり越える試みがまったくないわけではない。飯田（2020）は、ヒトに憑依して超自然的な霊力を行使したり未来を予見したりするマダガスカルの精霊に着目し、直接的に経験しえない他者の悪意や呪薬の効果、霊的世界などがリアリティを帯びる過程を考察した。そしてそのなかで、モノの物理的特性や道具の構造的特性に根ざしたアフォーダンスに加えて、ヒトの発話や所作、メディアの刻印などの記号（的なもの）のはたらきを指摘した。周知のとおり、記号学においても、あるモノと類似する別のモノが相互の記号としてはたらくことがあると指摘されており、また、原因と結果（たとえば野火とそれにともなう煙）が記号的に結びつく解釈されることがある。とりわけ、チャールズ・サン

ダース・パースが提唱した記号の3分類のうち、アイコンやインデックスは実在のモノを土台として成りたっている¹⁾。つまりモノは、人間の行動を物理的に受けとめるアフォーダンスのほかに、非物理的な意味作用をもヒトに提供するのである。この事実を照らせば、記号論とアフォーダンス論との関係があらためて考察されてもおかしくない。

心理学と袂を分かった代表的なイギリス社会人類学者（としてインゴルドが言及する研究者）エドモンド・リーチも、物理世界と記号世界を連繋させる可能性に気づいていたふしがある。彼は、記号論とコミュニケーション理論をとおして民族誌記述の営みを一般化した著作『文化とコミュニケーション』において、生物学的におのずから生じる行動以外の人間行動を技術的行為と表現的行為のふたつに分類した（リーチ 1981）。しかし後段においては、議論の焦点をもっぱら表現的行為に限定してしまい、技術的行為をとおしたヒトとモノとの関係についてはほとんどにも述べていない。技術的行為の理論化は、いまだに着手されず放置されているといえる。そのためにはいくつか手がかりがありそうだが、湖中と飯田が着手した道具製作の議論は、その端緒となる可能性があるといえよう。

このように、アフォーダンス理論を人類学の分野で活かしていくうえで、コミュニケーションに着目することには戦略的な見込みがある。というのも、日常的なコミュニケーションを成りたさせるにあたり、われわれは、物理世界と記号世界の双方から資源を動員しているからである。そこでまず、記号論やコミュニケーション理論の特性を詳しくみておきたい。とくに、これらの理論が発話すなわち聴覚刺激を考察対象としてきたことは、視覚刺激と触覚刺激を重視してきたアフォーダンス理論と折りあいがよくない理由のように思えるからである。

可視光線の波長がおよそ 400～800 ナノメートルであるのに対して、可聴域の音波の波長は 16.5～16500 ミリメートルとひじょうに長く、 $2 \times 10^4 \sim 4 \times 10^7$ 倍ほどの大きな開きがある。このことは、視覚刺激を知覚する視細胞が、聴覚刺激を知覚する鼓膜や耳小骨にくらべてはるかに小さなサイズであることに対応している。可視光線は波長が短いため、細胞の集合である器官に物理的な振動を与えることはできないが、網膜上の視細胞に化学的な変化をひき起こせる。ヒトの手のひらで操作できる数センチメートルていどの物体を例としてみると、その表面の状態を 1 ミリメートル未満の解像度で伝えるのに適しているのである。

いっぽう、音波は可視光線より波長が長く、その媒体である空気は高い粘性をもつため、小さな振動を伝えるのにむいていない。数センチメートル程度のモノから音が出ていたとしても、モノの表面のどの部分が音源であるかを識別することはむずかしいだろう。ヒトの聴覚は、音源であるモノの位置や動きを知覚するのがせいぜいで、その表面の性質といったきめ細かな性質を知覚するには限界がある。

光の波動も、音波と同じようにモノの位置や動きを視覚的に伝えることができる。これは、網膜に視細胞がたくさん並んでいるので、表面に関する微細な情報を広い範囲で面的に捉えられるためである。さらに、眼球を動かしたり、体を移動させたりすることで、表面の連続のようすをより広範に捉えることも可能である。このことは、触覚の延長として視覚が奉仕できることの原因にもなっている。視覚は、モノの表面の状態についてだけでなく、その全体的な位置変化を知るのにも優れた感覚なのである。

暗闇のなかで手に触れたモノの正体を探るとき、われわれはしばしば視覚イメージを想起する。また、地面をみながら歩いているとき、地面の凹凸のアフォーダンスを考慮しながらわれわれは足を動かす。目をつぶって歩くこともできないわけではないが、視覚を利用できれば、足の裏で受けとめた地面の反動と視覚刺激の両方を考慮して次の体勢に入ることができ、動きはスムーズである。つまり視覚は、触覚の前触れとしてわれわれにたち現れており（野矢 2007）、逆に視覚を絶たれたなかでは、触覚が視覚を代替しているといえる。見慣れないモノの表面のようすを知ろうとするとき、われわれは眼球を動かして観察すると同時に、手で撫でまわしてそのテクスチャを確かめる。柔らかいモノに関しては、手で押さえたときの反動を受けることで、そのモノの表面だけでなく内部状態を推測する手がかりを得る。視覚と触覚は、かなりのていど相互変換しながら連動し、互いの不足を補いあっているのである²⁾。

これとは対照的に、聴覚は、感覚器の位置をいくら移動させても、また触覚のような他の感覚を援用してみても、われわれに対する「たち現れ」を変えない。しかし、屏風の向こうのモノはみえないのに対し³⁾、屏風の向こうからの音が聞こえることはしばしばある。これは、音波の波長が光よりもはるかに長く、大きな障害物を回りこんで伝わりやすいためである。こうした「回折」とい

う現象が起こりやすいことも、聴覚の有利性に数えられよう。

このほか、書き言葉に先がけて話し言葉を発達させたことも、聴覚の特徴である。聴覚刺激は遮蔽物を回折して伝わりやすく、音源の変化を察知するのに特段の注意は必要ない（資格の場合は目を向けていなければならない）ので、多くの動物が聴覚刺激を警戒音として利用してきた。警戒音とは、ある個体が同じ群れの別の個体に対して危険を知らせるための音声である。このとき、警戒音を聞いた個体が注意を向けるべき対象は、警戒音を発した個体（音源）でなく、それとは独立した場所にある「危険」である。つまり、音源から独立した「意味」を指示する点において、音声情報は重視されるようになるのである⁴⁾。視覚刺激もインデックスとして機能することがあるが、他の点での優位性において利用されることが多いためか、あるいはヒトに備わる優れた発声器官が生成する聴覚刺激ほど容易に生成できないためか、意味的な結びつきを想起させるうえでは聴覚のほうが長じているようである。

もちろん、ヒトの用いる音声言語は、警戒音よりもはるかに詳細な情報を伝える。救急車のサイレンも、予告なく耳に入る聴覚刺激という意味で警戒音に似ているが、この聴覚刺激が知らせるのは危険ではなく、近所に病人かけが人が出たという事実である。聴覚刺激は、直接には音源や障害物の位置と動きだけを伝えるものだが、間接的には、音源から独立した危険その他の情報を、場合によってはこと細かに伝えることができるのである。

4 関連性理論

これまでに述べたふたつの理論の違いを表にまとめると以下のようなになる（表 1）。

表 1 アフォーダンス理論とコミュニケーション理論の異同

アフォーダンス理論	コミュニケーション理論
経験されるものが対象	主として経験されざるものが対象
物理世界を説明	主として記号世界を説明
技術的行為を説明	主として表現的行為を説明
視覚と触覚にもとづく	主として聴覚にもとづく
環境と身体との相互作用	広い意味での予知

いっけん両者は対照的にみえるが、よくみるとコミュニケーション理論は、アフォーダンス理論の一部を対象としたりそれを説明したりすることがある。最上段からみてみると、「主として経験されざるものが対象」となっているのは、コミュニケーション行為においては経験されるものも経験されざるものも話題にできるためである。聞き手が経験していないことについて、すでにそれを経験した話し手が関連することを伝えるというのは、コミュニケーションの典型だ。しかしそれだけでなく、両者ともが経験したことがらをふり返って話しあうこともめずらしくない。記号世界だけでなく物理世界をも説明できることや、表現的行為だけでなく技術的行為をも話題にできるというのも、同様にコミュニケーション理論の適用範囲の広さを示している。また、ほとんどのコミュニケーション理論は話し言葉という聴覚現象を例にとっているが、書き言葉という視覚現象や点字という触覚現象をも対象としうる。

ただし、だからといって、コミュニケーション理論が優れているわけではない。リーチの著作に関連して先述したように、コミュニケーション理論においては、経験されざるものを極端に重視するあまり、目今の物理世界の記述をないがしろにする傾向があった⁵⁾。このことは、アフォーダンス理論が得意とする記述場面と比較すれば明らかである。アフォーダンス理論はたとえば、歩行において宙に浮いた足が次に地面から受ける衝撃など、近い未来において身体が受ける作用を身体が予知し、細かな動作によってそれを受けとめようとするさいの「準備の過程」を説明する（本稿第4章参照）。つまりアフォーダンス理論は、目今の物理世界の動きを精細に記述するのに優れているのである。

とはいえ、コミュニケーション理論もまた、目今の物理世界を対象としうる。いくつかの民族誌では、コミュニケーション理論と関わりの深い文化記号論にもとづいて、物理世界が説明されてきた（e.g. Turner 1970; サーリンズ 1987）。しかし直接的にそれをおこなうのではなく、前述したように「経験されざるもの」の考察をとおしてそれがおこなわれる。歩行の例にたち返れば、アフォーダンス理論はせいぜい数秒先のできごとを予見して現在を記述するにすぎないのに対し、コミュニケーション理論に関わる予見の範囲はもっと広く、進行中の運動に関わりのない1日先や1ヶ月後、数十年後、さらには世界の終わりの予言などにも関わっている。つまりコミュニケーション論は、記号世界にまつわるさまざまなコ

コミュニケーション過程を迂回することで、アフォーダンス理論が扱えない遠い未来の分析を可能にしているのだ。コミュニケーション理論はまた、互いに声をかけ合いながら歩く2人の歩行者を記述し、彼らが物理世界の動きに同調しながら自身の身体の動きを微調整するようすも分析できる。このことを思えば、たとえ物理世界と記号世界に区別があったとしても、それらを扱う理論を分ける必要はないように思われてくる。

そのことを前提に、異なる経緯で洗練されてきたアフォーダンス理論とコミュニケーション理論を対話させてみたい。両者の統一をこの小論で図ることは不可能だが、それが可能であるという見込みだけは、多くの読者に理解していただきたい。それをもっとも効果的にはたす方法としてわたしが期待するのは、数あるコミュニケーション理論のなかでも関連性理論と呼ばれているものと、アフォーダンス理論との対話である。

コミュニケーション理論は、どんなものでも多かれ少なかれ言語学と関わる。なかでもとりわけ、関連性理論は認知言語学を背景としており、認知心理学を意識しつづけてきたアフォーダンス理論とも相性がよい(スペルベル/ウィルソン1999)。関連性理論はまた、発話に接した聞き手がおこなう推論の過程に説明の力点を置いている。これはちょうど、知覚主体が環境からモノのアフォーダンスや情報⁶⁾を求めて探索する過程によく似ている。関連性理論の推論過程とアフォーダンス理論の探索過程、ふたつの理論で互いに類似するこれらを統合的に説明できれば、人類学の一般的理論を洗練できるかもしれない。関連性理論が人類学者ダン・スペルベルの貢献によって洗練されてきたことを考えれば、その期待は大きいといえよう。

関連性理論をひとことで述べれば、話し手の発話を聞き手が解釈する手がかりを両者の共有するコード(暗号表)に求めるのではなく、両者が共有する文脈を求める考えかたである。ここでいう文脈とは、焦点化された発話の文脈という意味だが、関連性理論を理解するために重要な概念でもあり(注4を参照)、日常的に用いられる「文脈」という語とは区別したほうがよい。本稿では、日常的な意味での文脈を、コンテクストと呼んで区別している。ともかく、関連性理論において発話の解釈の手がかりとなる文脈とは、①会話に加わる人たち自身の発話に明示された想定(assumption)、②明示されていないが発話から推測されうる想定、

③発話で用いられる概念に関わるあらゆる百科事典的記載事項 (encyclopedic entry) などである (注4も参照)。ただし、一般的にヒトは、これら膨大な量の想定や百科事典的記載事項を瞬時に検索したうえで発話を解釈するわけではない。発話内の想定は関連性が高いはずだという期待のもとに、文脈の幅を絞りこんで解釈するというのだ (スペルベル／ウィルソン 1999: 160-172)。

つまり解釈の過程では、潜在的な解釈の手がかりのほとんどが排除され、残るわずかな手がかりだけが吟味されるのだ。ヒトは、関連性に照らしておこなうそのような選抜により、認知効率を高い水準に維持しているといえる。この考えかたはじつは、無数の知覚刺激のなかから一部のみをアフォーダンスとして身体と環境とのきり結びに利用しようとする知覚主体の営みにきわめてよく似ている。アフォーダンス理論における資源の探索は物理世界でおこなわれ、関連性理論における推論は主として記号世界でおこなわれてはいるが、そのプロセスは相同的なところがあり、また両世界の重なりが大きいことも考えあわせれば、ふたつの理論は相性がよいように思われてくる。

関連性理論はまた、それ以前のコミュニケーション理論が依拠してきた非現実的な仮定にもとづかないという意味でも、アフォーダンス理論と相性がよい。記号をもっとも厳密に定義するソシユール言語学において、記号とは、知覚刺激 (発話音声や文字など) と概念とが対となって結びついたもののことである。通常は、知覚刺激がシニフィアン (能記) に、概念がシニフィエ (所記) に相当する。関連性理論以前のコミュニケーション理論においても、上記の定義に厳密にかなう「記号」のみが、コミュニケーションで重要な役割をはたすと考えられていた。すなわち、発話や文字には一意に対応する意味があり、そうした刺激との意味対応を示したコード (暗号表) を話し手 (書き手) と聞き手 (読み手) が共有していれば、話し手の意図は過不足なく伝わるというものである。しかし実際には、こうしたコードが人間の認知過程で実際に重要な役割をはたしているかどうかは疑問である。人類学が対象とする象徴表現 (および、人類学者が読者に伝える民族的記述そのもの) が通常の記号よりはるかに複雑で、シニフィエが多くの要素 (そのいくつかは記号的関係によって相互に結びついている) の複合物であることを考えれば、確たるコードが存在しないことこそ一般的なコミュニケーションのかたちだと考えたほうがよい。関連性理論の創始者のひとりであるスペルベルは、

確たるコードの不在を念頭に置いて従来のコミュニケーション理論を批判し（スペルベル 1979; 1984），その基礎のうえに関連性理論を洗練させた。その意味で関連性理論は，人類学者が直面する事実をより一般的なかたちで説明するコミュニケーション理論ということができる。

5 エコロジカル情報と記号の併用

関連性理論においても，発話と意味との結びつきが前提とされている。この意味で，関連性理論の言語解釈は，あくまで記号論の伝統をふまえたものだ。しかし関連性理論では，ひとつの発話が一意の概念（想定または百科事典的記載事項など，注 4 参照）に結びついているのではなく，無数の文脈（概念以外のものも含む）に結びつくと考える。そして関連性理論が目を向けるのは，結びつきそのものでなく，紐づいている無数の文脈を絞りこむ過程である。この意味で，関連性理論は記号論の伝統に忠実とはいえない。むしろ，それまで受けいられていた記号論的なコミュニケーション理論を見なおすことにより，関連性理論は洗練されてきたのである。

アフォーダンス理論では，記号という概念が多用されないだけでなく，記号の性質をも兼ねそなえた「表象」という概念が慎重に回避される。リードのまとめによると，動物による刺激と反応の対応づけを精緻に明らかにしてきた心理学者たちの多くは，サイコロジカルな過程を次のように考えた。すなわち，多数の刺激を収集したヒトや動物個体は，それらを相互に関連させて解釈して，世界像すなわち表象をその内面に構成するというのである（リード 2000a: 20）。この考えかたの欠陥を，リードは次のように述べている。

心理的表象をもつ人は，みずからの直面している課題に関連した情報を与えてくれる側面をその表象のなかから同定しなければならず，しかも，そのように有用な側面を表象のなかから選択するには，当面の課題とその課題に関わる環境側の特徴も過不足なく選択しなければならない。つまり，一つの表象を利用するためには，当面の課題とその課題に関わる環境の特徴の両者を前もって理解していなければならないのだ！（リード 2000a: 22）

表象が実際に脳内で構成されているかどうかについては，議論の余地がある。

しかしリードはそれを完全に否定するのではなく、サイコロジカルな過程においてそれは重要でないのだと述べる⁷⁾。実際に「表象」が構成されているかどうかは、ひとえにそれが意味することがら次第であろう。いずれにせよ、個体は表象を構成してもただちに行動に移すことができず、むしろそれを再分解して選択しなければならない。これは、ひとつの知覚刺激に結びつく無数の概念をふるい分けるといふ、関連性理論における発話解釈作業に類比できよう。以下のくぐり方は、スperlベルらがまさにそのように考えていることを表している。

ひとつの現象が非常に多くの想定を顕在化する場合がある。しかし、こう言ったからといって、その人が実際にそのような想定のをどれをも立てるといふことではないし、ましてや、すべてを立てるといふことではない。(スperlベル/ウィルソン 1999: 183)

労力面で考慮に入れておかねばならないのは、ある文脈を呼び出し、その文脈の中で想定を処理するのに労力が必要であるだけでなく、その想定を立てるのにも労力が必要であるということである。(スperlベル/ウィルソン 1999: 185)

このように、アフォーダンス理論の論者も関連性理論の論者たちも、完全な表象を脳内にかたちづくったうえで情報処理をおこなうことがきわめて不経済であることを指摘する。こうしたパークリー流観念論にもとづく考えかたは、両理論による否定を待つまでもなく、アメリカのプラグマティズム哲学が19世紀後半にすでに否定していたし(パース 2014a: 68-71)、神経生理学と人工知能論を架橋しようとするダニエル・デネットも観念論を激しく攻撃している(デネット 1998: 200-201)。日本でも、大村敬一が、民族誌的解釈において観念論を用いることの誤謬を詳しく論じている(大村 2013)⁸⁾。

アフォーダンス理論は環境資源(エコロジカルな情報)の探索を、関連性理論は文脈(記号とその集合)を用いた推論を議論の焦点としている。このため、両者は相容れないようにみえるが、実際にわれわれが日常生活でおこなっているのは両者の折衷ではなからうか。まずアフォーダンス理論についてみると、サイコロジカルな過程における資源は環境内つまり身体の外だけでなく、身体の内にもあるのだという当然のことが想起される。とくに精緻化した知覚システムを備えた動物は、本稿第1章で紹介したように、みずからがきり結びつつある環境のな

かにないアフォーダンス群をもしばしば利用する（リード 2000a: 203）。

たとえば、アフォーダンス理論が注目するフットイング（歩行する足を道が反作用をもって受けとめつづけること）を例にとろう（ギブソン 1985: 39）。われわれは、アフォーダンスを視覚的に知覚することで適切な足の着地地点を見さだめ、それを考慮しながら足の動きを調整する。しかし正確に言えば、われわれは視覚だけに頼っているわけではない。足と地面との距離は、つねに目測されているわけではないからである。フットイングにおいては、目測を省略するかわり、足が地面を離れてからの時間や足の動かしかたといった過去の経験（日常的に反復する経験も含む）を顧慮して足の位置を推測することがしばしばある。これは、環境の探索の範囲を狭めてもなお、アフォーダンスを理解できることの証左である。こうした省略をおこなうためには、環境や動作過程についての経験が記号のかたちで脳内に記憶されていなければならない（ただし、完全な表象のように精緻である必要はなく断片的でよい）。これは、過去の経験についての記号すなわち文脈をふまえながら発話を理解するのと、じつは同じことである。

別の例として、関連性理論が注目する次の会話を検討しよう（スペルベル／ウィルソン 1999: 162）。以下の会話は、すれ違っているのかかみ合っているのか、第三者は考えれば考えるほどわからなくなってしまいが、少なくともかみ合っている可能性は認められるという例である。

ピーター：疲れたよ。

メアリー：デザートはできているから、私が主菜を作るわ。

ふたりの会話が成立するためには、ピーターの発話が「ピーターはメアリーに食事を作ってほしいと思っている」という意味でメアリーに理解され、かつ、「食事は少なくとも主菜とデザートからなる」という文脈（コンテキスト）がふたりのあいだで共有されている必要があり、さらにそれをふまえて、メアリーの発話が「メアリーはピーターの望むことをしてやるつもりだ」という意味でピーターに理解されていなければならない。これら3つの条件が成りたつのはかぎられた状況かもしれないが、第三者は、これらの条件がふたりのあいだで高い関連性をもつのだろうと想定してこの会話を理解する。ピーターとメアリーは聴覚をとおして

互いの状態を知覚し、会話を成りたさせるための環境を理解するだけでなく、環境からは知覚できない文脈をもふまえて会話を成りたさせているのである。読者もまた、この文例を目で追いながら、その文脈に思いを馳せて会話が成りたっていることを理解する。つまり、経験されざるものが関係者すべてにおいて想起されているのである。

議論をアフォーダンス理論の側に近づけるためには、語用論や言語行為論を紐解いてみればよい。上記のピーターとメアリーが電話で話しており、通りを隔てた電話ボックスのなかにメアリーがいるのをピーターがみているとしよう。しかしメアリーのほうは、ピーターが自分をみていることに気づいていない。そこへ、制御を失ったロードローラーがゆっくりと現れ、メアリーが話している電話ボックスに突っこもうとする。ピーターはそれをみて注意喚起しようとするが、メアリーは自身に迫る危険に気づかず、ピーターの発話を支離滅裂なものとしか受けとれない（大澤 1995: 23–26）。この事例は、コミュニケーション過程においても環境のアフォーダンスが重要な役割をはたすことの好例である。危険としてさし迫っているロードローラーにメアリーが気づいたならば、ピーターの発話が、ローラー車の接近という最高度の関連性をはらんだ事実を気づかせるための意図明示的の伝達であることを理解できたにちがいない。このように関連性理論では、情報そのものでなく情報の関連性（の大きさ）を話し手が聞き手に伝えようとするという伝達意図のことが詳しく論じられている。このことは、アフォーダンス理論において、無数の知覚刺激のなかから特定のものに注意を向けさせるエコロジカルな情報（リード 2000a: 98–99）の検知が詳しく論じられることに対応している。つまりふたつの理論は、個体にとって直接的に意味をもつ情報⁹⁾と、その重要性に気づくための情報が、個体が置かれた知覚環境に所与としていずれも存在すると論じる点で共通している。

6 不完全な時空間情報をとおした認識

われわれは日常的な行為を成りたせるうえで、環境内に散在する情報とそこにはない記号的文脈をそれぞれに利用している。いずれも複雑な認知過程である。しかしそれだけではない。両者を組みあわせながら状況の理解を深めるといふ、

はなれ技をもやっけてのけているのである。たとえば、これまでの生態心理学が考察してきたのは、被験者自身の直接的な知覚と運動機能がいかに結びついているかということだった。しかし日本のある研究チームは、この点の考察を深めるうえで、遮蔽物の背後にあるモノ（餌）を道具で手元にひき寄せる行動をニホンザルに学習させる実験をおこなった。それによるとニホンザルは、モニタが提示する映像をみながら、孫の手を使って巧みに餌を得るようになるという。延長された知覚器であるモニタ映像と、延長された身体である孫の手の動きを結びつけて、あらたな行動の拠点となる「ニッチ構築」を脳内でおこなうというのである（入来・河合・大村 2023: 387–390; 茂木 2001: 112–114）。このことは、生態心理学であれ記号論であれ、単一の理論だけでは説明できない。

なぜそのようなことができるのか、認知科学の観点から解明すべき点はまだまだ多い。それができるからには、松果体のような単一器官が認識をつかさどるのではなく、大脳の複数の領野がモジュールとして連繋しながら知的活動をはたしているのだろうと多くの研究者は考えている（Fodor 1983; Sperber 1994）。かりに、さまざま領野の機能を連動させる「管制塔器官」がヒトにおいて発達しつつあるとしても、その適応価のもとに個体選択がおこなわれて機能が完成するためには、ヒトが出現してから経過した進化的時間はまだ短すぎるからである。

以上のことは、意識の進化という巨大なテーマのもとで、デネットが詳しく論じている（デネット 1998; 2001）。本稿のしめ括りとなる本章では、意識の流れが生ずるメカニズムを、デネットの「多元的ドラフト説」の立場からまとめておこう。

環境内にない「文脈」は、ひとことではいえず身体内、おそらくは大脳の内部に格納されている。しかしそれは鮮明に定着しているわけではないし、完璧な表象のように総合されてもおらず、それどころか随意に呼びだせるものですらない。それらは断片として脳内に散在しており、必要なときに呼びだせないこともあるし、必要ないときに意識にのぼることもある。これを情報と呼ぶことも記憶と呼ぶこともできよう¹⁰⁾。パースであれば、単純に記号と呼びそうである。彼によれば、記号とは、類似・近接・因果関係によって他の対象との連合関係を示すものである（パース 2014b: 135）。こうした見解は、ソシユール言語学に基礎を置く記号論の主流からはじゅうぶん評価されていないが、心理学的な連合を論じるうえ

で有用であることは強調されてよい。ソーシャル流の記号は、恣意的にしか結びつきをもたないふたつのものの対（たとえば名称と意味、あるいは文字と音価）のことであり、それをよせ集めても暗号表以上のものにしかならず、関連性理論における文脈とほとんど接点をもたない。しかしパース流の記号をよせ集めるなら、われわれが世界を認識するうえでのほとんどすべての前提が含まれることになり、それを文脈と呼びかえて関連性理論に当てはめてもほとんど支障がない。

脳内の記号は、精密な図像や流暢な文章のように完成した表象ではなく、断片的である。そして、大脳内の多数の領野で処理されかかった状態で放置されていて、あたかも文章草稿（ドラフト）のようである。時間を経るなかで、記号が劣化したり脱落したりしてしまうのも無理はない。

ただし正確に言えば、記号が劣化するから記憶違いが生ずるのではない。われわれが記憶の想起と呼ぶのは、記号の近接的連合を手がかりに再現された空間配置、および因果関係を手がかりに再現された時系列にもとづいて、脳全体でおこなわれる無数の記号の総合である。現実には、脳内に再構成される。しかし総合はあくまで想起のつどにおこなわれるので、空間配置や時系列といった細部そして記憶の全体像は、否応なく毎回ズレをはらんでしまう（デネット 1998: 163）。その証左として、デネットは、閃光遅延効果という認知効果を重視する（デネット 1998: 143-144）。そして、異なったタイミングで生じ異なった領野で知覚された複数の刺激は、知覚後に時間的な調整を受けて意識にのぼるのだと論ずる。また、フラッシュバルブ・メモリーといわれる正確な視覚像の想起について考察した高木は、それが純粋に内的過程として進むのではなくさまざまな外的状況を反映するため、記憶がそのつど変化するようにみえると論じている（高木 2013）。記憶というのは、多くの場合、そもそも曖昧で不完全なのである。

しかし、想起がそのようにアドホックかつ単発的に生じる現象であるなら、われわれがひとつの流れだと信じている意識の正体はなんなのだろうか。

様々な時点と様々な場で、多様な「決定」や「判断」が行われている。より事態に即して言えば、脳の様々な部分が、例えば、はじめは刺激の単なる兆しを、次には位置から形を、さらにはまた（別の経路での）色彩から（見かけのうえでの）運動を、そしてやがては対象認識を、といった具合に、たがいに異なった特徴を順に識別できるような状態に入っていくのである。（デネット 1998: 166-167）

「総合」と書いたが、その場所やタイミングは特定できない。異なるタイミングで生じた複数の知覚も、ひとつの図像や論理として総合されうるからである。異なる領野が、関連性の焦点とでも呼びたくなるようなことがらをめぐって連繋し、知覚や認識と呼ぶには中途半端な処理中のことがらをもち寄ることで、「物語的重力の中心」が明確化される。そしてそれを契機として、身体内外の探索・推論がより深くおこなわれることになる（デネット 1998: 521）。

意識とは、大脳内の特定の構造を指すのではなく、ある種の状態である。そして意識の流れは、特定の領野で神経が活性化と不活性化をくり返すようすというより、大脳内の多数の領野が連繋と分離をくり返すなかで生じるパターン変化なのだ」と筆者は考えている（デネット 1998: 201）。それが生じたり強化したりする契機として、自己刺激と呼ぶべきものが重要だとデネットは指摘する。ひとり言がよい例だ。領野間の連繋ができていないときに、ある領野がそれに関する発話を促すとする。環境内＝身体外に情報が放出されることにより、関連する複数の領野の活動が促され、同期が生じるというのがデネットの考えだ（デネット 1998: 232-234）。進化の初期段階あるいは発達の初期段階において、こうした「仮想配線（ヴァーチャル・ワイヤー）」の成功がたび重なると、個体は自己刺激を介在させることなく配線をおこなえるようになる¹¹⁾。このように意識の流れが生ずる過程はきわめて複雑で、だからこそ、完全な表象にもとづいた想起や行動は理論的に成立しがたいのである。

内的な動機づけにもとづいて行動をとるといった高度な情報処理も、おそらくはこうした複数領野の同調的活性化によって説明できる。しかしその適否は、大脳生理学の進展を俟って判断するほかない。本稿では、意識と呼ばれる大脳生理過程が身体内外の断片的な情報によってひき起こされることを確認した。身体の外にある情報の処理過程は、アフォーダンス理論と関連性理論がともに詳しく説明する。両者の違いは、情報処理にあたって身体外の資源を多用するか（アフォーダンス理論）、身体内の資源を多用するか（関連性理論）という点である。しかしどのような処理をほどこされたとせよ、身体外に由来する情報は、身体に受容されて他のさまざまな情報と連繋することで、より高次の過程をひき起こす。最終的にはそれが意識の一部をなすにいたるのだが、この最終過程を意識の流れとの関わりで記述することは、フィールドワークにおける驚き（飯田 2019）や困惑

(飯田 2020) を民族誌的に理解するうえで重要である。ただし現時点において、それは不可能といってよい。可能なのはせいぜい、他者の行為の背景にどのようなアフォーダンスや想定、百科事典的記載事項があったかを記すことだけである。民族誌的記述においては、これら「文脈」を可能なかぎり克明に提示し、民族誌の読み手が登場人物の行為をたどれるようにすることが望ましい。

謝 辞

本稿は、2021年3月21日にオンラインでおこなわれた第119回現代人類学研究会「文化人類学を自然化する」での発表にもとづくものである。この研究会は、国立民族学博物館で組織された同名の共同研究会(代表:中川敏)の成果発表の一環としておこなわれた。本稿のもとになった現地調査は、日本学術振興会の科研費補助金(課題番号JP25244043, JP15H02601, JP19H01400)によって可能となった。研究会の代表者およびメンバー、運営に尽力して下さった皆さまなど、関係者全員にお礼申し上げます。

注

- 1) 3分類の残るひとつはシンボルで、シンボルにおいてはシニフィアン(能記)とシニフィエ(所記)の記号的結びつきが薄弱だとされている(Burks 1949)。アイコンとインデックス、シンボルという3つの記号カテゴリーは、対象とのあいだにそれぞれ類似、近接、因果関係という結びつきを有している(本稿第6章参照)。なお、近年の民族誌においても、パースの考えかたはさかんに援用されるようになってきている。とりわけエドゥアルド・コーンの民族誌は、人間に特有とされる記号作用の過程を他の生物が萌芽的にもつかもたないかを考えるうえで参考になる(コーン 2016)。
とはいえ、言語以外のモノが記号論的な意味を帯びており、コミュニケーションの資源となりうるという指摘は、すでに人類学の分野でもなされている(菅原 2010; 木村 2018)。本稿では、アフォーダンス理論とコミュニケーション理論を架橋するための基礎作業をより広い視野からおこなったつもりである。
- 2) このことは、視覚障害者が聴覚よりも触覚に対して鋭い洞察を加えることと関係しているかもしれない(広瀬 2009)。
- 3) 屏風の向こう側にみえ隠れするものが現れたり消えたりしているのではなく、たんに自分の視点および遮蔽物との関わりで一時的にみえなくなっているのにすぎないという考えかたは、幼児期の早い段階で生ずる(且 2004)。ヒトは、知覚できないモノの状態を脳内で補足しながら、現実を認識しているのであり、さらには、図像の足りない部分を補完する能力もある。山田仁史(2022: 70)は、ヒトが宗教をもつにいたった基盤として、こうした想像力を重視している。モーリス・ブロックもまた、人類普遍の宗教現象を説明するうえで、ヒトが発達期に獲得する「心の理論」に着目することが重要だとしている(Bloch 2015)。
- 4) 後述する関連性理論においても、聴覚刺激は重要な「文脈」としてしばしば参照される。関連性理論における文脈とは、話者と聞き手の双方にとって明白なことがらであり、両者がともに知覚できる感覚刺激(とりわけ聴覚刺激)のほか、それと記号的に結びつく意味(「想定」)、その場の知覚環境には存在しない百科事典的記載事項などを含む(スベルベル/ウィルソン 1999: 160-166)。本稿第5章参照。
- 5) たとえば、後述する関連性理論の創始者のひとりダン・スベルベルは、初期の著作『人類

学とはなにか』を、金でできた心臓をもつ竜の話から始めている。にわかには信じがたいこの話は、スベルベルがエチオピアの調査地で耳にしたことで、彼はたんにそれを聞いただけでなく、ヨーロッパ製の銃ならそれを殺すことができるから殺してくれと頼まれたのだ。こうした「いっけん不合理な信念」を民族誌家がいかに扱いうるかという問題について、スベルベルはまるまる 1 章を費やしている。この問題に対してスベルベルが与えた回答は、調査地の人びとによる発話と実践を記述する作業とそれを分析する作業とを厳密に区別すれば、「非合理的な」信念がもつ合理性に近づけるといものだった（スベルベル 1984）。その後洗練された関連性理論は、フィールドでくり広げられる人びとの会話をよりよく記述するために開発された方法論であり、分析の混入を避けて記述するための方法論でもあると筆者は考えている。

- 6) アフォーダンスも情報の一種だが、リードは両者を区別する。リードによれば、情報とは「有機体をその環境と一体に結びあわせることを助けるもの」であり（リード 2000a: 110）、きり結びの直接的な対象となるアフォーダンスを特定するための資源である（リード 2000a: 99）。関連性理論の用語に倣えば、アフォーダンスとは認知主体にとって有用な「情報」、（アフォーダンス理論でいう）情報とは、（関連性理論でいう）情報が認知主体にとって有用であること（話し手がいる場合にはその「伝達意図」）を気づかせるための刺激である。
- 7) 表象をさほど重視しないリードの態度は、関連性理論の立役者のひとりであるスベルベルにも共通する。関連性理論発表後の著作において、スベルベルは表象という概念を頻繁に用いて文化を説明しているが（スベルベル 2001）、その語で彼が指示しようとするものの範囲はきわめて広く、信号、テキスト、発話、絵などあらゆる記号や創作物を包括して「公的表象」に呼ぶのに加えて、それらの「受け手」の脳内に生じるあらゆる状態変化を「心的表象」と呼んでいる（スベルベル 2001: 43）。社会的過程と心的過程をまとめて分析するうえで、こうした幅広い「表象」概念は有効だろう。ただしそれは、本稿で言及したような、世界の精密な写像としての表象とは大きく異なる。日本語版の『関連性理論』（ここでは、ふつう「表象」と訳される *representation* という英単語が「表示」と訳されている）で詳しく論じられるのはそのうちごく一部で、感覚器をつうじて得られた表象（感覚表示）から変換されたもののうち、非論理的な側面を捨象した論理的な表象（概念表示）のみであり（スベルベル／ウィルソン 1999: 85）、精密な心的写像は論じられていない。
- 8) 本稿では詳しく論じきれないが、これらの論者がたんに方向性を同じくしていることだけが重要なのではない。彼らの議論は、生物学的に同じ機能を有したヒトという種がなぜ異なる価値観をもつにいたるかを説明するうえできわめて重要である。民族誌は、法則定立よりもコンテキストに注意を払っているにもかかわらず、異なる価値観をのり越えて合意に至ろうと試みてもいる。このいっけん矛盾した試みを理解し、さらには価値観を越えた合意にいたるために、彼らの議論は有用性が高いと筆者は考えている。
- 9) アフォーダンス理論においてこの情報が情報と呼ばれることはなく、一貫してアフォーダンスと呼ばれ、他の情報と区別されている。
- 10) 筆者はさらに、同じものをイメージと呼んでもさしつかえないと考えているが（箭内 2018）、詳細な検討は別の機会におこないたい。また、記憶の断片と呼ぶこともできるが、より統合的な記憶と混同しないよう注意が必要であろう。
- 11) この議論をとおして、デネットは、ヒトと他の動物とが大分水嶺によって隔てられるのだという誤解を未然に回避する。さまざまな領野の分業体制はヒト以外の動物にも備わっているものであり、ヒトと他の近縁種とのあいだで大きな機能差はない。こうした個別の領野が連繋によって生ずる意識の流れは、スティーズン・ミズンが認知的流動と呼んだものと同じかもしれない（ミズン 1998）。そうだとすれば、それはホモ・サピエンス段階になって生じた進化である。いずれにせよ、こうした連繋過程は、特定の器官が本来の機能を果たしつつ他の機能にも流用されることによって実現するのであり、漸進的進化を無視した突飛な発想ではない。

参考文献

〈日本語〉

飯田卓

- 2010 「ブリコラージュ実践の共同体——マダガスカル、ヴェズ漁村におけるグローバルなフローの流用」『文化人類学』75(1): 60-80。
2019 「技術習得と知識共有——マダガスカル漁撈民ヴェズの事例から考える」杉島敬志編『コミュニケーション的存在論の人類学』pp. 304-342, 京都: 臨川書店。
2020 「経験されざるものを知る——マダガスカル漁撈民ヴェズにおける霊と呪術のリアリティ」川田牧人・白川千尋・飯田卓編『現代世界の呪術——文化人類学的探究』pp. 437-465, 横浜: 春風社。

入来篤史・河合香史・大村敬一

- 2023 「進化史のなかの人類——人間の創造性と可変性の進化史的基盤」大村敬一編『「人新世」時代の文化人類学の挑戦——よみがえる対話の力』pp. 381-412, 東京: 以文社。

大澤真幸

- 1995 『電子メディア論——身体メディアの変容』東京: 新曜社。

大村敬一

- 2013 「交合する身体——心的表象なき記憶とことばのメカニズム」菅原和孝編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』pp. 154-185, 京都: 世界思想社。

春日直樹編

- 2011 『現実批判の人類学——新世代のエスノグラフィへ』京都: 世界思想社。

木村大治

- 2018 『見知らぬものと出会う——ファースト・コンタクトの相互行為論』東京: 東京大学出版会。

ギブソン, J. J.

- 1985 『生態学的視覚論——ヒトの知覚世界を探る』古崎敬ほか訳, 東京: サイエンス社。

湖中真哉

- 2007 「小生産物(商品)の微細なグローバルゼーション——ケニア中北部・サンプルの廃物資源利用」小川了編『躍動する小生産物』(資源人類学4) pp. 25-62, 東京: 弘文堂。

コーン, E.

- 2016 『森は考える——人間的なるものを越えた人類学』奥野克巳・近藤宏監訳, 近藤社秋・二文字屋脩共訳, 東京: 亜紀書房。

佐々木正人

- 1994 『アフォーダンス——新しい認知の理論』東京: 岩波書店。

サーリンズ, M.

- 1987 『人類学と文化記号論——文化と実践理性』山内昶訳, 東京: 法政大学出版局。

菅原和孝

- 2010 『ことばと身体——「言語の手前」の人類学』東京: 講談社。

スベルベル, D.

- 1979 『象徴表現とはなにか——一般象徴表現論の試み』菅野盾樹訳, 東京: 紀伊國屋書店。

- 1984 『人類学とはなにか——その知的枠組みを問う』菅野盾樹訳, 東京: 紀伊國屋書店。

- 2001 『表象は感染する——文化への自然主義的アプローチ』菅野盾樹訳, 東京: 新曜社。

スベルベル, D. / D. ウィルソン

- 1999 『関連性理論——伝達と認知(第2版)』内田聖二ほか訳, 東京: 研究社。

高木光太郎

- 2013 「既知から既在へ——フラッシュバルブ・メモリーへの生態学的アプローチ」菅原和孝編『身体化の人類学——認知・記憶・言語・他者』pp. 228-252, 京都: 世界思想社。

田辺繁治

- 2002 「再帰の人類学における実践の概念——ブルデューのハビトゥスをめぐり、その彼方へ」『国立民族学博物館研究報告』26(4): 533-573。

- 且直子
 2004 『認知発達』 大津由紀雄・波多野諄余夫編『認知科学への招待——心の研究のおもしろさに迫る』 pp. 1–16, 東京：研究社。
- チン, A.
 2019 『マツタケ——不確実な時代を生きる術』 赤嶺淳訳, 東京：みすず書房。
- 鶴見俊輔
 1999 『限界芸術論』 東京：筑摩書房。
- デネット, D. C.
 1998 『解明される意識』 山口泰司訳, 東京：青土社。
 2001 『ダーウィンの危険な思想——生命の意味と進化』 山口泰司監訳, 石川幹人ほか訳, 東京：青土社。
- 床呂郁哉・河合香吏編
 2011 『ものの人類学』 京都：京都大学学術出版会。
- 野矢茂樹
 2007 『大森荘蔵——哲学の見本』 東京：講談社。
- パース, C. S.
 2014a 『人間に生得的に備わっているとされてきた諸能力についての問い』 植木豊編『プラグマティズム古典集成——パース, ジェイムズ, デューイ』 植木豊編訳, pp. 61–92, 東京：作品社。
 2014b 『四つの能力の否定から導かれる諸々の帰結』 植木豊編『プラグマティズム古典集成——パース, ジェイムズ, デューイ』 植木豊編訳, pp. 93–143, 東京：作品社。
- 広瀬浩二郎
 2009 『さわる文化への招待——触覚でみる手学問のすすめ』 京都：世界思想社。
- ブルデュ, P.
 1988 『実践感覚 1』 今村仁司・港道隆訳, 東京：みすず書房。
- 古谷嘉章・関雄二・佐々木重洋編
 2017 『「物質性」の人類学——世界は物質の流れの中にある』 東京：同成社。
- ミズン, S.
 1998 『心の先史時代』 松浦俊輔・牧野美佐緒訳, 東京：青土社。
- 茂木健一郎
 2001 『心を生みだす脳のシステム——「私」というミステリー』 東京：日本放送出版協会。
- 箭内匡
 2018 『イメージの人類学』 東京：せりか書房。
- 山田仁史
 2022 『人類精神史——宗教・資本主義・Google』 東京：筑摩書房。
- リーチ, E.
 1981 『文化とコミュニケーション——構造人類学入門』 青木保・宮坂敬造訳, 東京：紀伊國屋書店。
- リード, E. S.
 2000a 『アフォーダンスの心理学——生態心理学への道』 細田直哉訳, 佐々木正人監修, 東京：新曜社。
 2000b 『魂（ソウル）から心（マインド）へ——心理学の誕生』 村田純一ほか訳, 東京：青土社。

〈外国語〉

- Bloch, M.
 1991 Language, Anthropology and Cognitive Science. *Man (N. S.)* 26(2): 183–198.
 2005 *Essays on Cultural Transmission*. Oxford: Berg.
 2015 Durkheimian Anthropology and Religion: Going In and Out of Each Other's Bodies. *HAU: Journal of Ethnographic Theory* 5(3): 285–299.
- Burks, A. W.
 1949 Icon, Index, and Symbol. *Philosophy and Phenomenological Research* 9(4): 673–689.

- Fodor, J. A.
1983 *The Modularity of Mind: An Essay on Faculty Psychology*. Cambridge: MIT Press.
- Iida, T.
2019 Traveling and Indwelling Knowledge: Learning and Technological Exchange among Vevo Fishermen in Madagascar. In K. Omura, G. J. Otsuki, S. Satsuka, and A. Morita (eds.) *The World Multiple: The Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds*, pp. 190–204. London: Routledge.
- Ingold, T.
2000 *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. London: Routledge.
- Mauss, M.
1967 *Manuel d'Ethnographie*. Paris: Éditions Payot.
- Sperber, D.
1994 The Modularity of Thought and the Epidemiology of Representations. In L. A. Hirschfeld and S. A. Gelman (eds.) *Mapping the Mind: Domain Specificity in Cognition and Culture*, pp. 39–67. Cambridge: Cambridge University Press.
- Turner, V.
1970 *The Forest of Symbols: Aspects of Ndembu Ritual*. New York: Cornell University Press.